慢性副鼻腔炎における起因菌の検討
－内視鏡手術症例についての検討－

江　崎　伸　一　　大　野　伸　晃　　村　上　信　五
名古屋市立大学耳鼻咽喉科

慢性副鼻腔炎の発症はウイルス感染，細菌感染，アレルギーなどを起点として炎症の遷延化を生じ，自然排泄路が閉塞され細菌感染が慢性化する場合が多い．そのため薬剤の内服や吸入による保存的加療に抵抗する症例に対しては，近年安全かつ低侵襲な内視鏡下副鼻腔手術がよい適応となっている．一方で手術適応となる患者の理学的・画像所見と起炎菌に対する細菌検査との間での検討を行った報告は少なく，今回の検討を試みた．

当大学病院および関連施設における慢性副鼻腔炎罹患患者で，手術適応と診断された126例を対象とした．手術前に鼻汁を採取し，細菌培養・同定を行った．またCTにより各副鼻腔陰影の程度をスコア化し，術前および術後３ヶ月における変化を評価した．同時にアンケートにより自覚症状の変化も検討した．副鼻腔炎の重症度や改善度に起因菌の関連の有無につき，報告する予定である．